

生活上の注意 痛みがあると診断されたら

- 痛みのサインに気をつけましょう。
- 定期検査を受けましょう。
- 季節や気温、環境の変化など、いろいろな要因で痛みが発症することがありますので、様子が普段と違うと感じられた場合は獣医師にご相談ください。

痛みをみつけて管理するために

定期検査

行動観察

リハビリ

痛みのサインを
チェック

+ 猫用 **オンシオール[®]錠**



気づいてあげられるのは、
あなただけ。

監修：日本大学生物資源科学部 佐野 忠士 先生

猫の痛み

痛みがとれて、また一緒に遊べるように



この小冊子は、猫用オンシオール[®]錠を処方された飼主様へのお薬のご案内です。

猫の痛み



猫は痛みを隠してる？

あなたは歯が痛いとき、どうしますか？

我慢する。薬を飲む。歯医者に行く。家族に相談する。

いろいろあると思います。

猫は、痛いところがあっても、言葉で伝えることができません。

自分で薬を飲んだり、病院に行ったり、

あなたに相談することはできません。

また、痛みがあることを人間のように

表現することもあります。これは、

猫が人間より痛みを感じないからでは

なく、遠慮しているからでもありません。

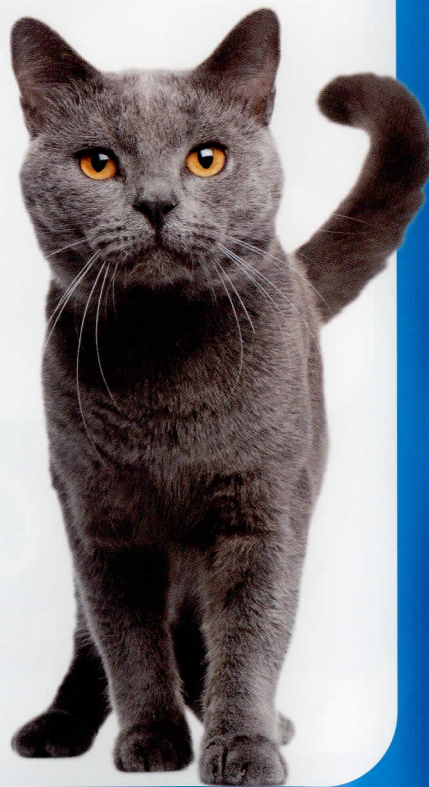
猫の痛みの感覚は、人間と同じである

ことは科学的にも証明されています。

つまり、猫は人間と同じように痛みを

感じているのに、うまく人間に

伝えることができていないだけなのです。



痛いときの猫の様子は？

痛みのサイン

猫が人間と同じように表現しなくても、普段と違う様子から、飼主であるあなたには、痛みのサインがわかることがあります。下記のような場合、あなたの猫はどこか痛いのかもかもしれません。気づいたときは、状況を記録して、獣医師に相談しましょう。

☐ 落ち着きがない

☐ 眠ったり、くつろいだりしない

☐ トイレの外で糞や尿をしてしまう

☐ 隠れる、警戒する、逃げる

☐ 遊ばない、好奇心がない

☐ 身体に触ると嫌がる、うなる

☐ 痛みのある部位を気にする、なめる、かじる

☐ ぐったりしている

☐ 食欲がない

☐ 毛づくろいをしない



痛みの原因と症状



猫の痛みの原因

手術後の痛み

怪我などによる
(外傷性の)痛み

骨、筋肉、関節などの痛み

運動器疾患による急性の痛み

猫の痛みにも、骨折や捻挫のようなものを原因とするものがあります。これらを原因とする痛みに伴う症状には様々なものがあり、手(前肢)や足(後ろ肢)をあげるというわかりやすいものから、よたよたした動作や疲れやすさとして現れるわかりにくいものまでいろいろあります。痛みの発生した初期の段階で痛みのサインに気づくことは難しいのですが、普段と違う様子から、少しでも早く痛みに伴う異常を見つけてあげることがとても大切です。



消炎鎮痛薬 オンシオール®の効果



オンシオール®とは

オンシオール®は、猫の痛みと炎症を和らげる、**非ステロイド性消炎鎮痛薬**です。これまでの動物用の消炎鎮痛薬と比べて、痛みを感じるシステムにより良く作用し、痛みを抑える効果に優れ、さらに、消化器系や腎臓、血液など、身体に対する副作用が比較的少ない傾向があります。

オンシオール®

猫のために開発された
新しい消炎鎮痛薬

痛いところに早く届いて、
高い効果を示す

全身への影響が少なく
身体に優しい

効果が長く続くから、
1日1回で大丈夫

猫が好むフレーバーの、
小さな錠剤で飲ませやすい

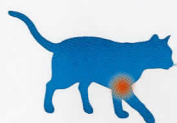


オンシオール®は 痛いところに届いて働きます



オンシオール®は、
約30分で痛いところに届いて、
痛みを和らげます。

オンシオール®は血液中に長く残らず、痛いところだけで効果を
発揮するので、全身への影響が少なく、身体に優しい薬です。



投与30分後



1.7時間後

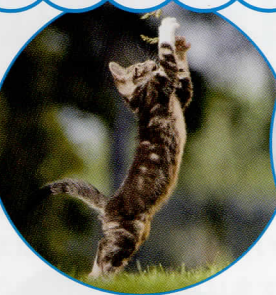
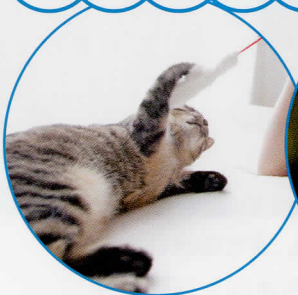


10時間後



24時間後

痛みがとれて、また遊べるように...



猫のQOL(生活の質)を考えた薬です。

猫用オンシオール®錠の飲ませ方

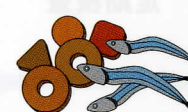


猫用オンシオール®錠は、小さな錠剤で
猫が好むフレーバーなので、
嗜好性が高く、飲ませやすい薬です。

食事の前後30分を避けてください



猫用 オンシオール®錠



30分
以上



30分
以上



猫用オンシオール®錠

※錠剤は実物大です。



体重
2.5~6kg

6mg



体重
6~12kg

6mg

×2

主な副作用：消化器系の症状(嘔吐、軟便など)、腎臓疾患(元気がない、食欲がないなど)、血小板減少(血が固まりにくいなど)などがあります。このような症状がみられた場合は、すぐ獣医師にご相談ください。